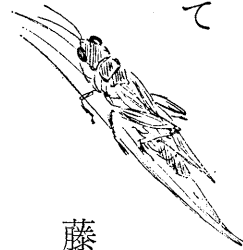


幼児教育第二世紀を迎えて



藤田復生

我國の幼児教育も一世紀を経て、善きにつけ悪しきにつけて大きく変容してきたことは事実です。私など、この道に足をふみ入れてやっと三十年を越したばかりで、戦前、戦中の御苦労を乗り越えて来られた諸先輩から見れば、いわば戦後派の苦労知らずで、勝手なことを言いながら育って来た若者と同じで、諸先輩から聞く話と、文献・資料にたよって保育の歴史を推察するばかりです。おこがましく意見などという気持ちではなく、この三十年間、私なりに感じ、思いをめぐらして来たことを、私なりに述べさせて載くことを御許し下さい。

当時私は、今日私が考えている程重大な決意で幼児教育を志したのでもなく、戦後のことで、かすかながら日本の将来を、若い国民に期待をよせてはいたものの、明治、大正、昭和の幼児教育に身をよせられた方々の熱情とくらべて我身の浅慮がは

ずかしく、また今日のように幼児教育が陽の目のあたる恩恵さえも受けておらない時代に幼児期の教育を進めて来られた熱情や子どもに対する深い愛情に深く畏敬の念に打たれ、幼児教育の重要さを身にしみて思うばかりです。

それに反し、戦後の幼児教育の安易さ、企業的性格さえも見られる今日の幼児教育を謙虚に反省をしなければならぬと思うのです。しかし、当時は外国からの保育理論の移入時代のためと、合わせて日陰の幼児教育実践が奉仕と愛情にたよっていたきらいがあつて、思う程には進歩性を見せなかったのではなからうかと思うのです。

我國の近代教育の父と言える倉橋惣三先生によって、初めて保育に科学性と創造性と基本的な幼児尊重の保育に燈火がともされました。しかし戦後の経済成長時代は、その精神を継ぐ幼児教育と、企業性を持った幼児教育の一群との混沌とした、今

日の幼児教育界をつくり出してしまったようにも考えられてなりません。

このような状態を造り出した要因には、我国の教育政策の根本的な姿勢が、明治以来、人間性や個性の尊重を考えるまえに、富国強兵時代から、欧米諸国への追跡、さらに戦後の経済国としての優位獲得方策の陰に、形式的な整備と就園普及が先行していることも見逃すわけには行きません。

戦後教育熱心な親たちの自信喪失は、ゆがめられた教育万能に火をそそぐ結果ともなつて、異常な教育熱、受験地獄と乱塾時代となり、これ程の混乱した教育狂乱の時代をつくつてしまいました。こんな悲しい精神を忘れた教育観は他国ではあまり見られません。一日も早くこのような時代を脱して、本来の人間育成の姿を取りもどさねばと思うのです。

自由社会であるからとて放置しておいて良い事ばかりではないはずですし、特に教育とは、百年の先にその成果が実を結ぶであろうと、思いを致して行かねばならない程重大な問題であるように思うからです。

戦後、教育基本法、児童憲章をはじめその他の諸立法によつて、保育の拡充が行なわれて来たのですが、法とは、その性格上の融通性がとほしく、その精神を生かすことより、その規定を形式的に守ることによつて自由さが失なわれ、進歩をものはばむ結果ともなっているように思うのです。

第二世紀に期待する課題

前述のように、今日の日本の幼児教育は必ずしも好ましい姿であるとはいえないとすれば、我々保育者も、社会も、その欠点を改めるにやぶさかであつてはなりません。またそれなくしては進歩は望めません。

今日幼児教育の課題として挙げられるものは、数多くあると思いますが、ここでは制度・内容・保育者像の三つの点から考へてみることにしたいと思います。

○

教育とは、人間が生涯を通じてその人らしく幸せに暮すためのもので、しかも社会に何かの貢献をし得る人格の形成でありましょう。そして幼児期とは、それを築く土台となる時代であつて、人間として、これらのあゆるものの発達の初期です。

基本的には、人間として、健康と体力が保持され、精神的に健全で、創造的な能力をそなえることが理想といえましょう。

○

我国の幼児教育は義務制に向かっていますが、義務制になることは、簡単には賛成しかねます。発達の差の多い幼児期には無理な強制にもなり、画一化されるおそれがあります。三歳以上年齢に達するまでの子どもが、すべて望ましい教育を受けられるようになるように国が努力することは、義務教育にするこ

とはなく、幼保の一元化や、助成拡充によってできることで

さらに、今の幼稚園設置基準は早急に改正してほしいものです。そもその発想が、小学校教育が基となっていて、幼児期の発達からみての特性が考えられているとは思えません。もっと柔軟で融通性のある基準が必要と思うのです。一例を挙げるならば、同年齢による組の編成にも無理があり、教師一人が保育を担当する形式も好ましくありません。組編成の幼児数と教師数を決めるより、一施設の規模を定め、それによって、望ましい保育が行ない得る教師の数と設備の大きさが決まるべきものでしょう。五百人も千人も幼児を擁する施設で、望ましい保育が行なわれるはずがありません。

幼小の連関についても、保育内容の六領域と小学校教科との連関でないことは当然です。幼児期の生活と小学校生活との連関が大切なのだろうと思います。中教審答申に「小学校低学年と幼児とは近似する点が多く、発達が速くなったから……早期教育による才能開発の必要がある」と言うような発想には根本的にずれがあるように思います。

幼稚園では、小学校に入学して小学校の生活を受け入れられて、授業の内容を吸収できる母体を育てておくようにして、小学校に送ることだと思うのです。もし授業受け入れに無理があるなら、小学校生活がもっと幼児期の生活の特性を理解し、取り入れるべきだと思うのです。世界幼児教育機構では、八歳以

下という考え方を持っています。それが間違えられたため、幼児期から塾、早教育、英才教育と第二の教育企業が並びこったのです。永い一生のうち一年二年など早かろうが遅かろうが、と考えるゆとりがなくなってきました。幼児期は徒に人間を早熟化させてはなりません。人間性育成の基礎時代であるからです。

幼稚園の公立化は幼児教育を画一化してしまっています。公費だから安いと言う理由で政治的に利用されるくらいがあります。が、公私立の費用の格差をなくすことは、別な方法で解決されなければなりません。義務制でない以上は、公私立の立場は同じであるべきだと思うのです。

○

保育内容は、望ましい人間として成長していく過程に、人間の基礎としてつくり上げて行かねばならない体と心と活動能力を、幼児の遊びである生活の中で培っていくための経験活動であって、領域に区分されるべきものではありません。総合的なものとして考える方が柔軟性があって、創造的で、生活と遊びである以上、幼児の自由性と自発性を阻害することがないからです。ですから、幼児の活動に応じて対応できる保育者と環境が必要です。

その遊びの中で、体と真・善・美・聖の情操と、個性的な、人間性豊かな人間としての基礎が芽生え、培われていかなければならないと思うのです。それには、大人たちが力を合わせて、

真実と最善をつくして、幼児教育を大切にしていくことだと思います。

○

設置者、園長も保育者の一員です。規準に合う施設が造られ資格を持った教諭を並べたから、幼児教育ができることではありません。幼児の教育に責任を持って、すべてを管理できることが条件であるはずで、それには、十年以上の幼児教育の現場で幼児と取り組み、幼児教育に対しての熱情を持っではじめてできることのように思うのです。小学校長兼任や副業園長で、安易に幼稚園が増え、就園率が上がったからといって、幼児教育が高まったとは言えません。

大学・短大で専門の基礎教育を受けて来た者がすべて保育者としての資格を持って居ると言うことにも疑問が持たれます。

一人前の保育者になり子どもを預けられるには、三年は現場での修業を要すると思うのですが、在学中実習四週間の短期速成ですぐ一組担任すると言うことで、しかも三年ぐらいで離職したのでは、専門職でもなく、また幼児教育の実績が挙がるはずはありませんし、全く幼児は犠牲者です。

保育者対象の講習会や研究会の多いことも不思議ですが、ほんとうの保育研究は、保育への熱情と、真に使命感を持って、実績を重ねた園長・保育者であってこそ研究の意味があるかと思っています。

三十年の間に、多くの現場職員の嘆きを聞き幼児教育の実状を見るにつけ、我国の保育は一体子どものためにあるのかという疑問が増すばかりです。このような保育を、この二世紀の今年からはんとうに考え直し、一日も早く日本のすべての幼児教育が理想を持ち、名実ともに充実されることが、第二世紀幼児教育の課題ではないでしょうか。

最後に一つの提案として、我国には総合された幼児教育研究所がありません。幼・保・学会等、それぞれがそれぞれの立場で団体活動はされていますが、公・私・幼・保一体となった幼児教育研究所が設立され、世界の文獻、日本の文獻が整えられ、我国全体の幼児教育が連係を持つ会館があるべきです。幼児教育関係者からの浄財を基金として、財界、政府はもとより、幼児教育に関心を持つ人々の協力によって国を挙げての幼児教育研究所が設立され、権力や政治の支配を受けない純粹な研究機関が、この第二世紀の早い時期に誕生することを心から祈ってやみません。

始めにお断わりしましたように、言いたいことを言わせてもらいましたが、尊敬する諸先輩、同志も多く持っております。また若いこれからの世代の保育者にも多くの期待をよせております。何卒、御寛恕下さるよう御願い致します。

(玉川大学・ゆかり文化幼稚園)